

クライミングウォール

プログラムの概要・ねらい

少年自然の家でのクライミングウォールは、スポーツ的要素だけではなく「壁を登る」という行為を通して自分自身と向き合う、自分自身の限界に挑戦することを目的としている。

互いに声援を送ることで、仲間とのつながりを意識するといった要素をもつプログラムである。また安全に活動を行うことの大切さを、実感することができる。

場所	プレイホール(半面での貸出)	  	
時間	人数・内容による		
値段	無料		
季節	年間	人数	60人程度
準備物 【利用者】 体育館履き、活動に適した服装、救急用品など 【自然の家】 クライミングウォール、安全マット、ハーネス、ヘルメット			

①準備

サービスセンター受付でプレイホール倉庫の鍵と利用記録簿を受け取る。

②実施の流れ

※事前に「クライミングウォール指導者養成講座」を修了した指導者が指導することが必須。

設備

6m (写真①)、9mの壁 (写真②)

プログラム紹介

○ボルダリング

3mまでの高さをロープなど使わずに登る方法である。
縦移動、横移動、ルートクライミングなどの登り方がある。

○トップロープクライミング

安全ベルト（ハーネス）を使い6m、9mの壁の最上部まで登る方法である。
6mに2コース、9mに1コースある。

※トップロープクライミングは、安全確保のため、身長115cm以上・ウエスト52cm以上の児童の実施に限る。

※詳しくは、資料「クライミングウォール指導者養成講座資料」参照

※尚、当所ホームページ掲載のプログラムシート「クライミングウォール」内にクライミングウォール映像教材（簡易版）が収録されているので、事前に指導者が確認することができる。



①



②



③後片付け

備え付けの掃除用具で、プレイホールの床をモップがけする。
クライミングウォールの設備を片付けた後、利用記録簿に使用回数を記入する。
プレイホール倉庫を施錠し、鍵と利用記録簿をサービスセンター受付へ返却する。
器具や用具に破損や故障があった場合は、サービスセンター受付へ連絡する。

クライミングウォール指導者養成講座資料

千葉市少年自然の家 指導者養成講座の目的

- ①クライミングウォールの指導手順を伝え、安全な実施方法、機器の取扱いについて伝える。
- ②クライミングウォールを利用する指導者へ安全なプログラム運用を伝える。
- ③人数に応じた効果的なプログラム指導方法を伝える。

期待される効果

- ①自分で目標を設定し、自己への挑戦をする中での自己確立を目指す基礎・基盤を培う。
- ②より良い人間関係づくりを行う。(体験する)
- ③安全に関する自己管理を啓発する。

(出典：クライミングを取り入れた冒険活動に関する実践報告ー室内クライミングウォールの活用ー)

名称について

ボルダリング	ロープを使用せずに3mまでの高さで、横や縦へ登る方法。
トップロープ	ハーネスを装着し、ロープを使用して安全を確保しながら3m以上の高さへ登る方法。
ホールド	壁に登るための手がかり、足がかり。滑りにくい材質で作ってある。
トップストップ	トップロープの時に使用し、ビレイヤーがクライマーの体重の約1/10の力でロープを支えることが出来るようにする機械。 オートブレーキ機能は付いていない 。ロープから手を離すとクライマーが地面まで落下してしまう。
A T C	トップロープの時に使用する、ロープの制動をコントロールする器具。
ハーネス	トップロープの時に使用する、安全を確保するためのベルト。
カラビナ	開閉できる部品(ゲート)がついており、ロープとハーネスなどの支点を安全・確実に繋ぐことができる。
ビレイ	クライマーの安全を確保すること。
クライマー	クライミングウォールに登る人。
ビレイヤー	クライマーの安全を確保する人。
サポーター	ビレイヤーの役割がきちんと果たされているか確認する人。



トップストップ



ハーネス



カラビナ



ATC

安全上のポイント

 : 指導上、特に注意が必要なポイント。事故防止のため必ず実施前に確認すること。

準備について

○備品

- ・ サービスセンター受付で指導者修了証を提示し、プレイホール倉庫の鍵と、クライミングウォール利用記録簿を受け取る。
- ・ プレイホールの倉庫から、必要な備品を出す。
- ※ プレイホール倉庫内にあるクライミングウォール指導用DVDを視聴する場合はセッティングを行う。

(なおDVDを使用して指導する場合は、事前に千葉市少年自然の家 HP (右 QR コード https://www.chiba-shizen.jp/movies/climbing_video.mp4) で視聴することをお勧めします。)



クライミングウォール指導用動画

○服装・準備についての確認

- ・ 動きやすい服装 (スカート不可) フード付きの衣類を着用している場合、フードがホールドに引っ掛かる可能性があり危険なため、脱ぐかフードを内側にしまう。
- ・ 必ず靴を履く (室内シューズでよい) 裸足厳禁。
- ・ 腕時計、アクセサリ (ネックレス、指輪など) をはずす。(指導者はネクストラップもはずす) 衣類のポケットを空にする。
→壁のホールドにひっかける、ぶつけて壊すなどの危険があることや、落下物による怪我防止、指輪によるロープの摩耗を防ぐため。
- ・ 怪我防止のため、手のつめを切っておくことが望ましい。

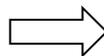
○準備体操

- ・ はじめにストレッチによって体全体をほぐすと同時に、股関節・肩・手足首を柔らかくする。腕・足の筋をよく伸ばす。
- ※ また参加者がなじめるような雰囲気作りを行うために、身体接触などを取り入れた人間関係づくりなど、アイスブレイクで緊張をほぐすと効果的である。

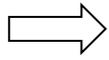
○マットの準備



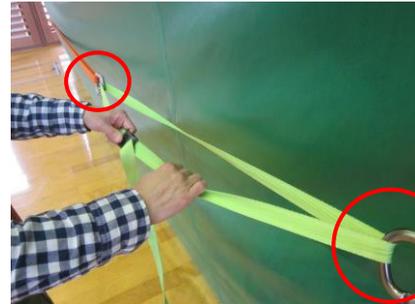
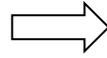
マットを支える。子どもたちも一緒に行う。



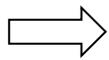
マットを固定するベルトを下から上の順に解除する。
※ベルトの着脱は指導者が行うこと。



マットを支えているロープの金具のツマミを押しロープをリリースする。



ロープに余裕ができたなら、カラビナを外す。ロープは壁際に置いておく。



マットを支えながらゆっくりと後ろにさがり、マットを倒す。



マットと壁の隙間がなくなるようにマットを壁側に押す。また左右の端をそろえる。

<ボルダリングのみ実施の場合>



クライミングウォール側面に収納されているロープを取り出す。



ボルダリングのみ実施の場合はマットの取っ手部分に取り付けられたベルトにカラビナを接続する。



ATCから出ているロープを上引き上げ、ロープのたるみをとる。

<トップロープ実施の場合>

トップロープ設置時、ロープに、ささくれ、裂け目などが無いが、必ず確認する。
 ささくれ、亀裂が発見された場合は、使用を中止し、サービスセンター受付まで連絡する。



クライミングウォール側に収納されているロープを取り出す。

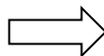


ロープを一旦伸ばし、ねじれやささくれなどが無いが点検する。

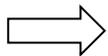
※ロープの準備、重りの準備を平行して行う。



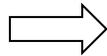
倉庫1階から、重りを運び出す。



赤い袋の中に重りを入れる。



重りを入れた赤い袋の様子



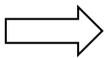
重りを入れた赤い袋の上に青い重りを乗せて完成



ATCのプラスチックの部分とロープがカラビナに入っているか確認(※)し、カラビナを袋のベルトに接続する。

(※) プラスチックの黒い輪とロープの輪にカラビナを通す。

ロープの輪 黒い輪
 カラビナ



ATCから出ているロープを上引き上げ、ロープのたるみをとる。
 ※9m側は黄色いラインより後ろに設置する。

ボルダリング

○登り方・降り方（安全管理のポイント）



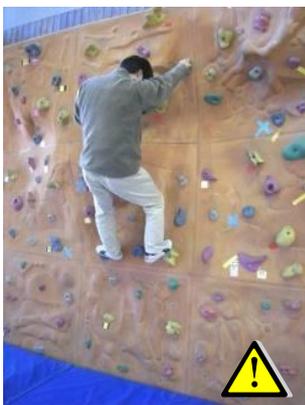
登っている人の下に入らない。



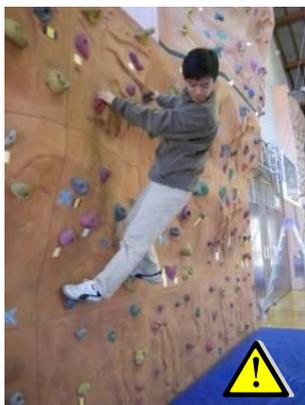
3m以上、登ってはいけない。



自分のコースからはみ出ないように登る。



飛び降りず、下まで降りてくる。
 ※3m付近からの飛び降りは非常に危険。



降りる際は下に人がいないか必ず確認する。



登る人以外はマットの上には上がらない。



マットの外で交代する。
 (赤いラインより後ろで待つ。)

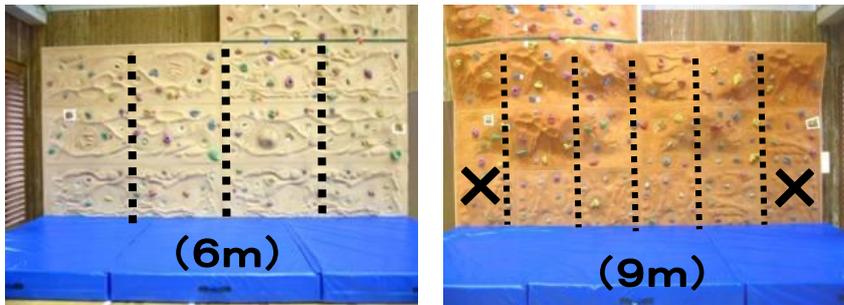


壁とマットの間に隙間が出る場合があるので、その都度マットを壁へ付ける。

○ボルダリングの実施バリエーション

-縦移動-

- ・クライミングの導入として実施する。→クライミングのプログラムの最初に実施するとよい。
- ・6m×4コース、9m×4コース 計8つのコースが設定できるので一度に大人数(60名程度)での実施が可能である。
- ・1人が壁に登る回数が多く確保できる。
- ・登ることが苦手な児童、生徒にとっては、登る高さが低いので取り組みやすい。



1つの壁につき4コース設定。
(9mの左右両端の1コース分はマットの外に落下する恐れがあるため使用しない。)

-横移動-



※9mの壁で横移動を行なう場合は、縦移動の時は使用できない左右両端の1コースも使用することができる。
※人数が多い場合は、壁の両端をスタートにし、中央部分をゴールに設定しても良い。

-陣取り-

- ・2グループに分かれて実施。
- ・壁の両端からそれぞれ1人ずつ横移動を始める。
- ・くちジャンケンなしの方が、より難しくなる。
- ・勝ったら、そのまま横移動を続け、相手チームのスタート地点を目指す。負けたり途中で落ちたら、ルール通り、壁から降り、自分のチームに戻る。その際、ジャンケンに負けたチームは、順番を待っていた人が、横移動を始める。
- ・勝った人が、相手チームのスタート地点までたどり着いたら、そのチームの勝ちとなる。



2人が出会ったところで、壁から手を離しジャンケンをする。

-ルートクライミング-

- 一度に登れる人数は、1つの壁で**3名**まで実施可能。
- 同じ色、同じ模様のテープで指定されたホールドだけを使い、「スタート」のホールドから「ゴール」のホールドをつかめたら、クリアとする。
- スタートする時は、スタートのホールドを両手でつかみ、スタートする。
※ただし降りる際は、指定されたホールド以外を使ってよい。
- コースによって、「足自由」となっている場合、手のみ指定されたホールドを使って登る。

※スタートが近い場合や、ルートが途中で交差する場合、譲り合って行う。

-ブラインドクライミング-

- ボルダリング、トップロープ共に実施可能。
- クライマーは、目をつぶって登る。(目隠しは、安全のため使用しない。)
- 怖くなった時や、降りる時は、目を開けてもよい。
- 終了後、上った時の気持ちなどを振り返り、共有するとよい。



ルートクライミング
コース例

トプロープ

1 クライマーとビレイヤーの準備

○トプロープの対象

安全確保のため小学生以上、身長 115cm 以上、ウエスト 52cm～107cm、
また大人が登る場合は、「ビレイヤー2」を必ず大人が行う。

○ハーネスの点検

※ハーネス装着の状態は指導者がカラビナの着脱時にチェックする。

ベルトが破損していないか確認する。
(ささくれ、毛羽立ち、裂け目のチェックする)



○ハーネスの付け方



オレンジ色のベルト部分が前に
来るように持ち、二つの小さい
輪に両足を入れ、ズボンと同じ
要領ではく。



オレンジ色のベルトが腰骨の
上の位置になるまで引き上げ
る。(足のベルトが十分に緩め
られていないと、オレンジ色
のベルトが引き上げられない
ことがある。)



右腰部分の金具を起点に腰のベル
トを締める。子ども一人で締める
のは難しいので、子ども同士協力
して実施する。



余ったベルトは、そのまま背中
側で軽く巻きつける。
強く巻きすぎると、こぶができ
てホールドに引っかかった場
合、かえって危険になるので、
あくまでも軽く巻く。



足のベルトは締めすぎない。
(締めすぎると足の動きに制限を
加えてしまうため)



腰のベルトがしっかりと締まってい
るか確認する。ハーネスを下に引っ
張って腰からずり落ちなければしっ
かり締まっている。

○ヘルメットの装着

ヘルメットは「クライマー」「ビレイヤー1」「ビレイヤー2」が装着する。



クライミング中の突然な落下や、落下物から頭部を守るためにヘルメットを着用する。

○ヘルメットのサイズ調節



ヘルメットの前を押さえながら、後ろにあるダイヤルを回して、大きさを調整する。
緩める…反時計回り
締める…時計回り



ワンタッチバックルを締めるときに髪を挟まないように注意する。長すぎるときは紐を矢印の方向に引く。
(緩めるときは反対) あごと紐の間に指1本入る程度にする。

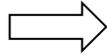
※頭を前後左右に動かした時に、ヘルメットがずれなければ正しく装着されている。

○カラビナの着脱位置

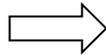


着脱位置：クライミングウォール壁に出来るだけ近い所

○カラビナの外し方



カラビナの安全環を右に 90 度回すとロックが解除される。安全環がきちんと戻り、ロックされているか確認する。



クライマーはハーネス（安全ベルト）を装着し、カラビナを装着する。

再度、指導者がハーネスを下に引っ張って腰からずり落ちないか確認する。

※カラビナの着脱は必ず指導者が行うこと。

○ビレイヤーの準備

・ビレイヤーとサポーターの位置、姿勢





ビレイヤー1の位置、姿勢



ビレイヤー2の位置、姿勢



サポーターの位置



指導者の位置、姿勢

※ロープの取扱いは必ず両手で行う。片手でのロープの保持も禁止とする。

2 登り方

○登る際に行う確認

※人為的なミスによる落下事故を防ぐために毎回、必ず行う。

- ・ **登る意思の宣言**

クライマーは登る前に指導者、ビレイをするメンバーに登る意思表示をする。指導者が見ていない、ビレイの準備が出来ていないなどの状況でクライマーが登らないようにするため。(例：「登ります!」「準備できましたか?」など)

- ・ **ビレイヤー同士の確認**

クライマーから登る意思の宣言を聞いたビレイヤーは、各ビレイヤーが正しい姿勢で所定の位置についていることを確認しあう。

- ・ **クライマーとビレイヤーとの確認**

(例：「準備できました!」「登っても大丈夫です!」など)

- ・ **クライマーはビレイヤーからの確認が取れたのちに登り始める。**

○登る際の注意点



登る時はロープを常に両手の間に位置し、登っている途中でロープをつかまない。



ロープが肩の外側にある状態で落下すると非常に危険。



壁の最上部には鐘が設置してある。



トップロープ実施中でも、3 m側で1名のみ、トップロープと平行してボルダリング（縦移動・ルートクライミング）が実施可能。

・ビレイヤーの動き

- ※ロープの取扱いは必ず両手で行う。片手でのロープの保持も禁止とする。
- ※ビレイヤーはいつクライマーが落下しても大丈夫なように準備をしておく。

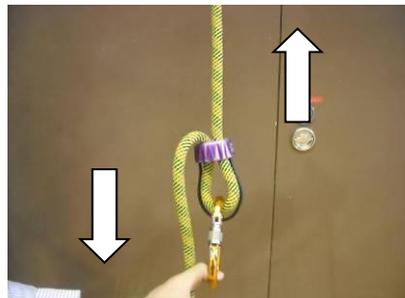
〈ATCの原理〉

ニュートラルな状態



ロープが平行になっているため、抵抗が少ない。この状態のときはロープの出し入れが簡単にできる。

ブレーキがかかった状態



ロープに対する抵抗が大きくなるため、ロープの出し入れにブレーキをかけることができる。

<ビレイヤー1>



ビレイヤー1 はクライマーのお腹付近にできるロープのたるみをとる。ロープがクライマーと重なり、見えづらいので注意する。



ロープを下に引っ張りたるみをとる。クライマーのペースにあわせ、この動作を繰り返す。クライマーを引っ張りすぎないように注意する。

<ビレイヤー2>



ビレイヤー2 はビレイヤー1 の後方にできるロープのたるみをとる。



A T Cから出てくるロープを上を引き上げる。横に引っ張ってしまうとブレーキ状態になるので注意する。

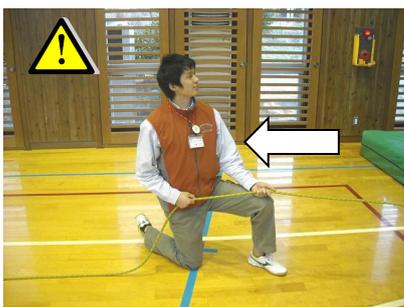


そのまま手を腰の位置に持ってくる。A T Cのブレーキ状態の形を作るために行う。



ロープをつかんでいた手を前方にスライドさせる。ビレイヤー2 はここまでの動作を繰り返し行う。手は離さない。

<指導者>



※指導者が最後部を持つことで、ビレイ全体の安全を管理する。

指導者はビレイヤー2 の後方にできるロープを回収していく。※必ず座って確保すること。

<サポーター>



サポーターはビレイヤー1 とビレイヤー2 が所定の位置につき、正しい方法でロープのたるみをとっているかを指示する。また、ロープのたるみが確認されたらすぐにビレイヤー1、ビレイヤー2 にたるみを取り除く指示をする。

3 降り方

○ 降りる手順 (必ず1～5の手順で行う)

- 1、降りることの宣言 → 「降りる際の確認」の項目で詳細説明
- 2、ロープを張る
- 3、クライマーはロープにぶら下がる → 「降りる際の注意点 (クライマー)」の項目で詳細説明
- 4、ロープを送り出し、下まで降ろす → 「降りる際の注意点 (ビレイヤー)」の項目で詳細説明
- 5、カラビナを外し、終了

○ 降りる際に行う確認

※人為的なミスによる落下事故を防ぐために毎回、必ず行う。

・ 降りる意思の宣言

クライマーは降りる意思を必ずビレイヤーに伝える。ビレイの準備ができていない状態でホールドから手を離してしまうと非常に危険である。(例:「ロープを張ってください!」など)

・ ロープを張り、クライマーがロープにぶら下がる準備を行う。

クライマーから降りる意思の宣言を聞いたビレイヤーは、ロープを張りクライマーがぶら下がっても大丈夫な体制を作る。

・ クライマーとビレイヤーとの確認

ビレイヤーはビレイの準備が整ったことをクライマーに伝える。(例:「準備できました!」「降りても大丈夫です!」など)

・ ロープにぶら下がることの宣言

クライマーはビレイの準備の確認が取れた後、ロープにぶら下がることをビレイヤーに伝える。(例:「ぶら下がります!」など)

・ クライマーがロープにぶら下がることの了承

クライマーからロープにぶら下がることの宣言を聞いたビレイヤーは、ビレイの準備ができた状態でクライマーがロープにぶら下がることを了承する。(例:「ぶら下がってください!」「わかりました!」など)

・ クライマーはビレイヤーとの確認が取れた後に、ホールドから手を離しロープにぶら下がる。

ビレイヤーはクライマーがぶら下がったのを確認した後、下ろす。

○降りる際の注意点

<クライマー>



降りる時は、ロープを両手で持ち足を壁から離す。



降りる時、壁を強く蹴らない。



座る位置まで降りてくる。

<ビレイヤー1>



クライマーの降りてくるスピードを見ながら、ゆっくりロープを送り出す。無理にロープを引っ張り出してしまうとビレイヤー2 が A T C に指を巻き込んでしまう恐れがあるので注意する。

<ビレイヤー2>



A T C 部分のロープを 平行の形にする ことで、A T C のニュートラルな状態を作る。A T C からこぶし2つ分あけた位置を両手で持ち、ビレイヤー1 のロープが出ていくスピードに合わせてロープを送り出し調整する。

<指導者>



指導者は最後部に付き、ロープの送り出しの最終調整をする。

<サポーター>



サポーターはビレイヤー1 とビレイヤー2 の動作が正しく行われているか確認する。

※クライマーが降りてくるスピードや体勢を確認しながら安全に行う。

○待機場所



トップロープを行うときは黄色のラインの後ろで待つ。

片付け

<ボルダリングのみ実施した場合>



ベルトからカラビナを外し、クライミングウォール横にある、袋の中にカラビナとロープを収納する。

<トップロープを実施した場合>



重りのベルトからカラビナを外し、重りを倉庫に片付ける。



クライミングウォール横にある、袋の中にカラビナとロープを収納する。
ロープとカラビナは絶対にほどかないこと。

○ロープの片づけ

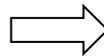


※ロープは一度広げ、ねじれをとる。その後ロープを端からまとめていく。
この時にロープにほつれがないか確認を行う。

○マットの片付け

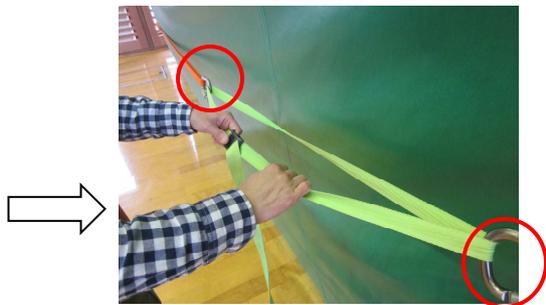


マットの前に横一列に並び、一斉にマットを持ち上げる。

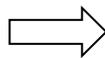


マットを支えながら、2本のベルトでマットを固定する。※ロープは壁とマットの間に納める。(上のベルト→下のベルト ※準備とは逆になる。)





ループ状になっている緑のロープに、カラビナを引っ掛ける。



緑のロープを引っ張り充分に締める。



○器材の片付け

- 1 使用した道具をプレイホール倉庫に片付ける。
 - ・倉庫内に収納状態の写真が貼ってあるので、そのとおりに入れる。
 - ・赤い袋の持ち手が切れてしまうので、中に重りを入れたまま運ばない。



- 2 クライミングウォール利用記録簿を記入する。
- 3 プレイホールのモップがけを行う。(モップの場所はプレイホール倉庫内。)
- 4 プレイホール倉庫の鍵と利用記録簿を、サービスセンター受付に返却する。

その他

○保険について

学校、団体が加入している保険が、クライミングウォールで怪我をした場合でも対応できるかどうか、保険会社に確認する。

○別紙はプログラム例を掲載。学校・団体の目的に合わせ、プログラム構成を行う。

クライミングウォールプログラム例

例①：トップロープを中心に実施

	6メートル壁	9メートル壁
0:00	マット準備・ハーネス準備 準備運動	
0:10	設備とクライミングウォールの説明	
0:15	ボルダリング(縦移動)	
0:35	グループ①縦移動 グループ②縦移動	グループ②縦移動 グループ①縦移動
	※様子を見ながら登る壁を交代する。 ※始めに登る壁だけを分けてあとは自由に登るようにしても可	
1:50	トップロープクライミング	トップロープクライミング
2:00	振り返り・片付け 終了	

例②：トップロープを中心に実施

	6メートル壁	9メートル壁
0:00	マット準備・ハーネス準備 準備運動	
0:10	設備とクライミングウォールの説明	
0:15	ボルダリング(縦移動)	
0:30	グループ①縦移動 グループ②縦移動	グループ②縦移動 グループ①縦移動
	※様子を見ながら登る壁を交代する。 ※始めに登る壁だけを分けてあとは自由に登るようにしても可	
1:10	トップロープクライミング グループ①	ボルダリング グループ② 縦移動→横移動→陣取り
1:50	トップロープクライミング グループ②	ボルダリング グループ① 縦移動→横移動→陣取り
2:00	振り返り・片付け 終了	

例③：ボルダリングを中心に実施

	6メートル壁	9メートル壁
0:00	マット準備・ハーネス準備 準備運動	
0:10	設備とクライミングウォールの説明	
0:15	ボルダリング(縦移動)	
0:35	グループ①縦移動 グループ②縦移動	グループ②縦移動 グループ①縦移動
	※様子を見ながら登る壁を交代する。 ※始めに登る壁だけを分けてあとは自由に登るようにしても可	
0:35	ボルダリング(横移動)	
1:05	グループ①横移動 グループ②横移動	グループ②横移動 グループ①横移動
	※人数によって壁の使い方を変える。 ※最後に陣取りを行っても良い	
1:10	休憩	
1:50	ボルダリング(ルートクライミング) フリーで実施	
2:00	振り返り・片付け 終了	

<よくある質問>

Q 講習会で教わったことを実施日までに忘れてしまいそうなのですが…。

A クライミングウォール実施前に、「クライミング指導者養成講座資料」をご確認ください。また、プレイホール倉庫内のホワイトボードに「ボルダリング・トップロープを行う際の注意点」の掲示をご用意しています。マグネットタイプになっていますので説明の際にはご使用ください。また、クライミングの補助教材として自然の家ホームページやプレイホール倉庫内の映像機器に DVD をご用意していますので指導の際にご活用ください。

Q クライミングウォールを実施するためには、何人の指導者がクライミングウォール指導者養成講座を受講することが必要ですか？

A 当所ではトップロープを実施する場合、各コース(全3コース)に養成講座を修了した指導者が指導することをお勧めしております。尚、クライミングウォールを実施するためには、最低でも1名以上は養成講座を修了した指導者が指導することが必須となります。指導者数につきましては各学校・団体でご判断ください。

Q 子どもがビレイをできるか不安です。

A ビレイヤー1、ビレイヤー2、サポーターなどの役割を子ども・指導者へどのように割り振るかは各学校・団体で子どもの実態や指導体制を考慮しご判断ください。なお、確実にロープを確保できる指導者の方が、最終確保を行ってください。

Q プレイホールでクライミングと他のスポーツを同時に実施したい。

A 各学校・団体にて事故につながらないようにご配慮ください。
・防球ネットを使用してください。
・トイレの移動の時は、気をつけてください。

Q 具体的な事故例を知りたい

A 事故例および事故が起きそうになった事例。

実施内容	状況	原因
ボルダリング	3m付近から跳び下りたことによる足首の捻挫や骨折。	足場の不安定なセーフティマットに勢いよく着地したため。
	マットの上で順番を待っていた子どもと、壁から跳び下りた子どもとの接触。	前の人が終了する前にマットに乗っていたため。また下を確認せずに跳び下りたため。
	マットと壁の隙間に足を挟んでしまい足首を裂傷。	マットと壁の間の隙間を直さずに行っていたため。
トップロープ	クライマーを降ろす際に、クライマーがロープにぶら下がったことを確認せずにロープを緩め始めてしまったため、クライマーが約1m落下。	ビレイヤーがクライマーのぶら下がってからの静止を確認せずにロープを緩めたため、たるみが発生し、その分落下した。
	降りる際にクライマーが壁を強く蹴ったためにハーネスを装着したカラビナを支点に体が反転し、頭が下の状態になった。(ハーネスの装着が不完全だった場合、ハーネスから体が抜けて頭から落下の可能性があった。)	壁を蹴ったことにより、ブランコのような状態になりバランスを崩した。
	クライマーがビレイヤーに確認をせず、登り始めた。指導者が気づくまでビレイがまったく行われていなかった。	登る前の確認を行わなかったことで、ビレイがされていない状況になった。
	クライマーが降りる際に、ホールドにヘルメット後頭部が引っかかり、あご紐で首をつるような状態になってしまった。	教員を含めてビレイヤー・サポーターがクライマーの様子を確認せずに下ろしていたため、ヘルメットが引っかかったことに気づかなかった。また、クライマーも正しい姿勢ではなかった。
	カラビナの装着を子どもが行い、カラビナのロックがかかっていない状態で登り始めた。(ハーネスからカラビナが外れる可能性や、カラビナが破損してしまう可能性があった。)	カラビナの装着状態についての確認を指導者が行っていなかった。
	クライマーが登りきった際に指導者を含めたビレイヤー全員がロープから手を離し落下の可能性があった。	ビレイヤーが周りの子どもたちと一緒に拍手をしてしまった。